宗岡小学校　1956
かいじろう画

宗岡小学校のシンボル　樟の木

『宗岡小学校の草創期（2、3ページ）に続く』

設立百三十七年！歴史が映える！志木市立宗岡小学校・・・

二宮金次郎像

市民プレス
SHIMIN PRESS

10月5日　第54号

発行人　特定非営利活動法人「市民フォーラム」
編集人　原　昭二
制作・印刷　デジタル工房
FAX　048（476）9111
〒353-0004　埼玉県志木市本町5-19-15

市民の目線で市民が発信する地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

CONTENTS

-PAGE 1 歴史が映える宗岡小学校137年！
河越館の主「河越重頼」の光と影
鎌倉幕府設立に向けて
-PAGE 2・3　宗岡小学校の草創期
-PAGE 4　1ページよりつづく
「河越重頼」の光と影
地域情報：東日本大震災復興支援チャリティー
賑やかだった「いろは市」

鎌倉幕府設立に向けて

治承（じしょう）・寿永（じゅえい）の乱

平安時代の末期、治承四年（1180）から元暦二年（1185）にかけて、大規模な内乱が勃発した。

そのころ、都の貴族は、もはや武士に頼らねば、自分たちの政争さえ解決することができず、また天皇家も、武士なしには政治ができなくなっていたが、その武士たちの中にも、平清盛を頂点とする平家の独裁を批判する機運が高まっていた。これを察知した後白河天皇の第三皇子、以仁王（もちひとおう）（1151～1180）の呼び掛けによって、各地に潜む源氏の武士団が一斉に立ち上がった。

源義朝の遺児・頼朝もそれに呼応した一人である。彼は相模・伊豆・武蔵の武士団とともに旗を揚げ、治承四年の八月二十三日、相模国石橋山において平家方の武士、大庭景親らと交戦した。大庭氏は坂東八平氏の一族、鎌倉氏の流れを汲む武家で、平治の乱後は平家の忠実な家人となっていた人物である。しかし、この戦いで、頼朝軍は大庭氏に撃破されてしまった。敗走を余儀なくされた源頼朝は山中に逃げ込み、船で安房国へ落ち延びたのであった。

源氏の惣領、源頼朝の驚くべき再起行始まる・・・

破れた頼朝は八月二十八日真鶴岬を出帆、海路で安房国に移動し、相模三浦半島の豪族、三浦氏と合流した。九月には、安房の在庁官人（ざいちょうかんじん）（国衙行政に従事した地方官僚）をはじめ房総の上総広常、千葉常胤、武蔵の足立遠元らの諸豪族を傘下に加えながら急速に大きな勢力となっていった。

この勢力の大部分は、坂東一帯に勢力をはる平氏系武士であり、在地領主（ざいちりょうしゅ）（荘園公領制の下で在地＜現地＞で農民・漁民らを支配する領主）でもあったのであるが、当時、坂東の在地豪族間の争いは激しく、特に親平氏勢力、そして新たに知行国主（ちぎょうこく）（貴族・寺社・武家が特定の国の知行権＜国務権・吏務ともいう＞を獲得した制度で、権利を得た有力貴族・有力寺社）となった平氏が支配していた国衙にも圧迫されていた千葉氏、上総氏などは、この挙兵を自勢力回復の好機と捉えたようだ。また、都から遠く離れた地にあって、豪族達は自力で所領を守るしかなく、その不安定な状態から抜け出したいという要求もあったのである。

治承四年源頼朝隅田川で旗上勢揃い

十月はじめ、源頼朝は隅田川を渡河して鎌倉に南下する。その折りのこと、河越館（現・川越市）の主であり、武蔵国でもっとも有力だった河越重頼を説き伏せた。同族の江戸重長（江戸館の主）も一転して頼朝に帰伏した。

河越重頼の光と影

かつては源氏に刃向かっていた秩父氏一党の畠山重忠も一転して頼朝に帰伏した。『源平盛衰記』によると、重忠は先祖の平武綱が八幡太郎義家（源義家）より賜った白旗をもって長井渡しに帰参、頼朝を喜ばせたという。

現在隅田川の右岸、白鬚橋に近い「石浜神社」の辺りと想像され、多くの武将が頼朝の宿舎で合流し、十月二日ついに三万騎の頼朝軍が隅田川を渡って進軍（4ページへ）

志木市立宗岡小学校の草創期

一。学制発布以前の教育

寺子屋・塾

江戸時代中期以後の教育について、確かな記録等はないが、残された資料としては筆子塚がある。寺子屋・塾等を開いていた師匠の没後、その遺徳を追慕する弟子たちが、師の恩に感謝しその供養をしたしるしに建てた石碑である。多くは「筆子中」とか「門弟中」とか「筆弟」等の文字が刻まれている。

寺子屋を開いた方を挙げると、まず実蔵院伝英、実蔵院第三世住職で、筆子塚は、実蔵院東側墓地の西隅、本堂に近く歴代住職の塋域（えいいき、墓地のこと）に、南面して建っている。同所に土肥小十良、抜井玄徳の筆子塚も並んでいる。玄徳は医師の傍ら附近の子弟を教えていたという。また実蔵院慶雅は同寺の第五世住職であるが、その墓碑の左側面に「筆子八人」とある。

千光寺寛阿は千光寺第二十九世の住職で、権大僧都であった。筆子塚は、千光寺の正門を入って左手にある観音堂の南側に東面して建っている。

池ノ内忠五郎は宗岡六〇〇番地の農家に生まれ、長じて農業の傍近隣の子弟に教授した。筆子塚は大仙寺本堂西側の同家墓地に東面して建っている。

中村光誉は文政十年新潟県に生まれ、浄土宗兼性寺で得度したと戸籍簿に記載されている。後江戸で上野寛永寺に入り勉学したとのことである。大日堂裏の墓地の片隅に墓石があり、筆子中などの文字はないが、筆子塚であるといい伝えられている。

高野佐十郎は天保七年（1836）宗岡村七五三番地の農家に生まれた。江戸に出て学んだという。幕末か明治初年頃から農業の傍、自宅で子弟に手習いを教えていた。

市之瀬春之助は、上宗岡で教授し、南畑に接していたため門下生は南畑の者の方が多かった。後に長く宗岡村長として令名のあった池内富太郎を教え、また志木へ出て医師を開業し、細田学園を創立した細田達等が教えを受けた。

臼屋で教授をしていたところから俗に「臼屋の先生」と呼ばれ、又、前姓を渋谷と名乗っていたらしく「渋谷先生」ともいわれていた。

二。宗岡学校

学制発布と学校創立

明治維新となり、新政府の政策として教育政策も幾つか示された。その一つは明治二年二月に出された「府県施政順序」である。その中に小学校の設置計画がある。次いで明治三年の二月に示された「大学規則」・「中小学規則」である。前者は一般民衆のための小学校であったが、後者は指導層のためのものであった。明治五年に至ってこれ等を統合して全国民のための教育計画として「学制」が発布された。

入間県では明治六年三月の管内人口が408,416人であったから、一中学区十三万人の基準により、管内を第十四、十五、十六の三中学区とした。当時宗岡村は、川越を中心とする入間、高麗、比企、新座、各郡にまたがる第十四番中学区に属した。この中学区内に小学校四十を置く計画であった。

明治六年六月十五日、入間、群馬の両県が廃止され、両管内を併せて「熊谷県」が設置された。熊谷県になっても中学区の構想は変わらなかったが、小学校の増設を計り、第十四番中学区に二百十八小学校を設けることに定められた。

小学校設立の経過

さきに述べたように、入間県では太政官布告に基づき説諭を管内に布告したが、当時宗岡村の属していた第二大区では、明田町会所に集められて、「急速に学校取設可申旨」を命じられた。そこで戸長たちは翌々日の七日から数次の会合を開いて、三月一日に至って「学校興立評議書」を作成して答申した。それによると大区内の七小区に各一ヶ所づつ七校を左記の通り開校するということであった。

一小区　並木村（現川越市並木）滝厳院
二小区　渋井村（現川越市渋井）蓮光寺
三小区　藤久保村（現三芳町）広源寺
四小区　鶴馬村（現富士見市）瑠璃光寺
五小区　大和田町（現新座市）普光明寺
六小区　岡村（現朝霞市岡）東円寺
七小区　橋戸村（現東京都練馬区）教学院

各小区に枝校を三乃至四ヶ所を設ける。

明治六年三月十三日に文部省布達第二十七号甲を以て、社寺内に小学校を設けること許したこともあって、急速に各地に小学校が設立された。

三。創立当時の宗岡学校

時に宗岡村は戸長荻島保蔵氏で、学校名は「第一大学区熊谷県管下十四番中学区入間郡百八十六番小学宗岡学校」と称した。校長（当時は首座教員といった）に中川善一郎が委嘱されたが、身分経歴等は残念ながら不明である。校舎として宗岡村二五三一番地の新義真言宗実蔵院の本堂が充用された。

四。曙学校

1。宗岡村、水子村の連合

明治維新以来の地方行政は、封建的な伝統を排除して新しい中央集権機構を確立するために進んで来たが、明治十一年七月には、いわゆる三新法といわれる「郡区町村編制法」「府県会規則」「地方税規則」が公布された。明治十七年に於ける宗岡村、水子村の戸籍人口は次の通りであった。

宗岡村　355戸　2029人
水子村　268戸　1579人
計　623戸　3608人

以上のような経過をたどって、新河岸川を隔てて相接してはいるが、双方を繋ぐ橋もない両村が、官憲によって秘密裡に編制されて合併させられた。そして宗岡村の戸長であった荻島保蔵氏が選ばれて聯合戸長となり、聯合戸長役場が宗岡村に設けられた。

2。曙学校の組織と教育

この聯合戸長役場の開設に伴い、宗岡学校及び水子村大応寺に設けられていた水子学校は廃止されて、明治十九年四月一日から新たに「曙学校」が発足した。本校を宗岡村字宿一二八七番地千光寺に置き、第一分教場を水子村大応寺に、第二分教場を宗岡村字前内手四〇四三番地伊奈益人氏宅（旧観音寺）に置くことになった。

本校であった千光寺は本堂に僅かばかりの増築をして、昇降口、湯呑所としたようである。分教場の伊奈氏宅の状況は不明で、何れもすでに取り壊されて現存しない。

五。第一学区宗岡学校

明治二十一年四月一日に、従来一千九百余あった県下の町村が三百七十九に整理された。

このような情勢の中で、宗岡村・水子村の聯合は解除され、宗岡村は独立し、水子村は針谷村と合併して水谷村となった。こうした行政機構の変革に伴って、曙学校は解消した。

独立した宗岡村の村長には、荻島保蔵氏が選ばれた。

明治二十二年五月に第一学区宗岡学校と改称し、本校を千光寺に、分校を伊奈益人氏宅に置いて曙学校に引き続いて授業を行なった。

六。宗岡尋常小学校

1。新小学校令の実施

明治二十三年に公布された小学校令は即日施行というものではなく、これを実施するには多くの規制を必要としたが、二十四年十一月に至ってそれに要する諸規則の発布が完了したので、埼玉県では明治二十五年四月一日から実施ということになった。

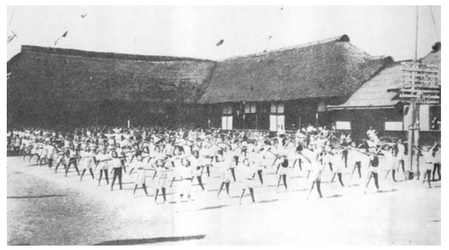
明治二十六年一月一日、校名を改めて「宗岡尋常小学校」と称し、三学級以上の学校に学校長を置くという県の規則に従ってはじめて学校長を置いた。

2。校舎新築

明治七年に宗岡学校が創設された当時から村民の中には校舎新築の希望もあったというが、種々の障害があってこれを果さず、止むを得ず寺院等を使用して来た。創立以来二十年をへて、就学者も年と共に増加し、これに応ずる建築物がないため、さして広くもない村内に二校を設けるという不便をきたした。

明治二十六年十月、時の村長荻島保蔵氏等鋭意校舎新築を計画、村民一般から寄附金を募った。村のほぼ中央である字五位戸三五三〇番地ほか七筆、1320坪の地を、所有者内田卯之助氏（現「内田倉庫」先代の内田太郎氏の祖父に当る）提供を得て新築に決定した。

学務委員であった金子直蔵氏を建築委員長として、明治二十七年一月工を起し、その三月建坪九十坪の新校舎が落成した。工費金壱千弐百余円を要し、四月一日をもって移転して開校式を挙行した。これに伴って分校は廃止された。



明治27年4月1日、宗岡村中央（現在地）に出来た宗岡尋常小学校（むぎわら屋根）、明治43年新築3教室（トタン屋根）の一部が見える。

＜樟樹＞のこと

宗岡小学校の校庭に繁茂し、校章に用いられた校歌にもうたわれている樟樹は、明治三十二年に皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）と、公爵九条道隆の第四女節子姫とのご婚約が成立したのを記念して、油井校長が校庭の一隅に苗床を作って、児童と共に種子を蒔き苗木を育て、ご成婚式の行なわれた明治三十三年五月に校庭の南の端に列植された。当時の校庭はこの樟樹の処までで、県道との間に細長い田があった。ここから西の方へ並んで五十本位はあったであろう。昭和二年に校地を拡張した時、他へ移植したり、拡張工事に働いた村民に分与されたりした。

この樟樹の種子をどこで入手したかについて、細田八左工門さんの話によれば、油井校長が九州から取り寄せたとのことである。一方金子後一氏が母堂から聞いたところでは、宮城拝観に行って御苑から拾って来たものだとのことで、残念乍らはっきりしない。

卒業生の思出から

くすの木

昭和53年度卒業　柏木　恭一

校歌の中に出てくるように、くすの木は宗岡小学校のシンボルであります。

僕が小学二年生のとき、宗岡小学校はちょうど百年の歴史を刻んだところであり、当時先生から「運動場のくすの木も百歳になったんだよ。」と言われ、幼心に百年も前の頃を想像しては、自分が知らない明治の時代をくすの木は見ているんだなと思うと、ただすごいなあと感じた当時の事を思い出します。（もっとも創立以来植えられていたわけではないらしいですが！）幸いにも、いつもくすの木の見える所に住んでいる僕は、日々くすの木を感じる事ができます。もちろん毎日毎日くすの木を眺めているわけではありませんが、それでも年に何度かくすの木の新緑にほっとし、冬には感慨を覚えます。それはまるで旧知の友のようなもの、普段はつきあいがなくとも、その存在自体が心に潤いを与えてくれる、そんなほのぼのとしたものであります。これからもたくさんの子供達が巣立って行くでしょうが、百五十歳、二百歳になっても、くすの木がそんな存在でいられる学校であってほしいと思います。

宗岡小学校百年祭に寄せて

（PTA副会長）抜井弥太郎

私はPTA役員として皆様方にお世話になり、はや四年目を迎え、はからずも宗岡小学校の創立百年記念事業の実行委員として、後世に残るこの意義ある事業に参加できましたこと、また母校であり想い出多い小学校時代をしのび、山口新太郎校長や大沢菊二校長先生を思いだします。

百年という長い間、多くの人達の教育に対する情熱と深い理解と協力により、ひたすら子どもたちの幸せと教育の向上に日夜ご尽力くださった関係者を初め、卒業生の皆様方に感謝申し上げます。

この長い間、学校のうつり変わりを見つづけて、大地にしっかと根を張った大きな楠の木・木造校舎もやがて取りこわされると、残るのは二宮金次郎の銅像とこの楠の木だけになってしまいます。立派になった新校舎や体育館に喜びながらも、なつかしい想い出の校舎がなくなることに、時の流れを感じる今日であります。

二宮金次郎の銅像は、昭和十九年に尋常高等小学校在学中の志村光昭君（現宗岡二小PTA会長）と小日向岩男君と内田誠一先生に私と一緒に成増の林コンクリート店より、大八車に乗せて運んできたのも私の忘れられぬ想い出の一つであります。

木造校舎を取りこわしても、どこか良い場所に移して保存していただきたいと思う関係者の一人です。

百年祭の事業として植樹の計画もあり、緑の多い学校に移り変わる日もそう遠い日ではないと思います。

学校の拡張改増築により、取られた、もと校庭のすみにあった桜の木も春ともなれば満開となり私達を楽しませたものであり、秋ともなればいちょうの葉が黄色く校庭一面に落ちたものであります。

今ではつつじがPTAの皆様方の環境整備作業の成果により、五月ともなれば校庭一ぱいの花を咲かせるのがきれいです。やがて、百年祭植樹が成長しておちついた緑の多い学校となることでしょう。

そのために、今後とも私達PTAも事業が事業活動を通じてより良い環境作りのために努力していきたいと思います。

開校百年にあたって

（昭和二八卒）穂坂邦夫

私が母校宗岡小学校を卒業してすでに、二十年が過ぎました。

当時の宗岡は、純農村地帯であり、学校周辺は一面が「田んぼ」で春先ともなりますと緑一色の様相を呈しておりました。

この頃は小学校、中学校が現在地に同居しており、しばらくの間は運動会、学芸会等小学生から中学生まで一緒に行ったように記憶しております。

各学年のクラス数も二クラス程度でした。ですから全校の生徒も「○年○組の○○さんはどこの家」というようなことまで知っており、同級生ともなりますと、ほとんどが苗字など使わず名前で呼びあったものです。

校庭には桜の木が大きな枝振りを見せており、敷地はかき根で囲まれ、その周りをよく草むしりをいたしました。

当時は、給食などという物はなく、それぞれ持参のお弁当を開くか、コッペパンにジャムをつけたものが最高の昼食でした。

家が近い生徒はよく家まで昼食に帰ったものです。又、農繁期になりますと、上級生には農繁休みがあり、その間、子守りや家の農作業の手助けをしたように記憶しております。

現在の宗小は、その校内外にわたって、著しい環境の変化があり、宗小のシンボルとも言うべき「くすの木」は現在も、当時の原型をとどめております。

日記によりますと「くすの木は私達の生活のすべてをじっと見守ってくれる父であり、校庭の桜の木は卒業、入学の時期になると、きれいにお化粧をし、ニコニコとおくりむかえてくれる母でした。」というように書かれておりました。

昭和4年12月26日、宗岡尋常小学校が県下に誇るモダン校舎として完成した。

その「くすの木」は宗岡百年の大発展の今日をどんな感慨をもってむかえたことでしょう。

「国家百年の礎は教育に有り」と言われます。宗小の歴史は、教育倫理や教育環境のうえに、大きな変革と変容がありましたが、今日の開校百年と、あの「くすの木」を見るときに、「大地にどっしりと足をつけ、風雪に耐え、動じることなく、高い識見に立っての人づくり」を堂々と一世紀の間行なってきた。

我が母校を誇ると共に母校を生んだ先人の御苦労を、感慨を新たにして、想い起こさずにはいられません。

今後先人の汗の結晶とも言うべき宗岡小学校の灯を絶やすことなく、尚一層の豊かな教育環境作りに努力することを誓って拙文を閉じます。

（現志木市議会議員）

「開校百年を記念し、私の思い出」から

（大正二卒）浪川七五郎

当時の宗岡小学校は大変粗末な校舎で、木造の平家建は良いとして、屋根は麦藁葺の窓は全部紙張り障子で、教室の数も少なかった。

私達生徒は、学校になれてきた頃、こんな悪口をいわれた。「宗岡学校ぼろ学校、麦わら屋根に障子窓、志木の学校いい学校、上がって見たらぼろ学校。」と大きな声でいってやった事がある。事実、生徒の質は素直で純真な子ばかりで悪い人は居ない。小さな物を落としても必ず先生を通じて手元に戻って来るのでした。

又、校長先生は公私共に大変評判の良い方で、信望の厚い立派な先生で子ども心にも誇りに思いました。担任の市之瀬先生は、厳しい中にも大変面倒見の良い方で、ことの私はご指導を戴きました。私が社会人となってからも長くご交際を戴いたものです。その他特に思い出の深い先生では、羽根倉に住む関根先生で、年の若い青年、とても明朗な方で祭囃子が大好きで、祭が近づく頃になると学校の勤務が終わるのを待って浅間神社に飛んで行き囃子に夢中でした。私も先生と一緒になって汗を流しながら良く囃子の太鼓を叩いたことは楽しい想い出の一つです。

「学校生活の芽ばえ」から

（大正六卒）内田敬八

当時は尋常科六年、高等科二年の八年制。私は、その八年をこの学校で過した訳である。古風で有名だった鍵型の藁屋根校舎と、継ぎ足したトタン葺き校舎の計八教室で、校舎の曲り角の北に面して、小使室、西に間仕切り取り払い自由の三教室、これが講堂代りで卒業式や学芸会等、挙式の場となった。東に宿直室の中庭に金木精が植えられ、秋には芳香を放っていた。更に廊下を隔てて教員室、藁屋の一教室から昇降口を隔てて四教室が並んでいた。

私は高等科に進み育つのを待って浦中へ進んだ。当時は進学も呑気なもので受験準備でもなく、問題集等おめにかからなかった。受験も終わってほっと何となしに別れ難く学校を懐しんでいると、ふと後ろに校長が立って居て「どうだった」とお尋ねになった。

「開校百年に想う」から

（昭二〇卒）細田喜八郎

校庭には樟とならんで、桜の木もたくさんあり、文字通り桜花爛漫の頃、父に手をひかれて入学式に登校したのを想い出す。

二年生の時、第二次大戦が始まり、六年生で終戦を迎え、小学校の過程は戦中教育であった。低学年は軍歌をうたい、戦勝ムード、高学年は空襲とサイレンの中で食料増産の一環として、甘藷、馬鈴薯を作り、学校で食べたり、農家の水田を借り稲作もやり、大勢の児童がワイワイそれは賑やかな農作業であった。

通学には、夏ははだし、冬はわら草履で、ズック、ゴム長靴は買いたくもなしという時代、習字も練習は新聞紙が黒くなるまで書き、清書のみ白い半紙に書くことができた。

資　料

「開校百年記念誌」昭和四十九年（百年記念実行委員会編集）

「開校百二十年記念誌」『くすの木』　1994年発行

①挙兵・山木館襲撃	8月17日	⑥千葉常胤参陣	9月17日
②石橋山の戦い	8月23日	⑦上総広常参陣	9月19日
③衣笠城の戦い	8月26日	⑧鎌倉着	10月 6日
④真鶴岬出航	8月28日	⑨富士山麓の戦い	10月14日
⑤安房国着	8月29日	⑩富士川の戦い	10月20日

（1ページから）武蔵国に向かったが、隅田宿でも多くの豪族の参陣があったという。

江戸時代から明治時代の浮世絵師、歌川芳藤（一鵬斎と号した）の大判三枚続きの絵、「治承四年源頼朝隅田川旗上着到勢揃之図」には、この情景が見事に描かれている。

重忠らは先陣を命じられて相模国へ進軍したといわれ、頼朝の大軍は抵抗を受けることなく、同月六日、先祖所縁の地として、かつて父義朝が居住していた相模国鎌倉に入って、ついにここを本拠地としたのである。

このころ武蔵国には群雄が割拠していて、頼朝が鎌倉に向かう再起行は、緻密な計画のなす業とは思えない。大きな運命の力を感じざるを得ないのである。

八月十七日、挙兵した頼朝は、まず伊豆目代の山木兼隆の館を襲う。二十六日には、河越重頼が、同族の江戸重長と共に数千騎の武士団を率いて畠山重忠軍と合流、三浦氏の本拠地だった衣笠城を攻撃する。

鎌倉に入ったのち、十月十四日には駿河国に侵攻し、富士山麓で、つづいて駿河国富士川で、頼朝軍は平維盛と戦った。

秩父氏一族だった河越氏は荘園をひらく

垣武平氏の流れをくむ秩父氏一族は、地方豪族として勢力を誇り、畠山氏、河越氏、豊島氏、江戸氏などを派生し、それぞれ畠山郷（現在は埼玉県深谷あたり）、入間郡（現在の川越市あたり）を治め、豊嶋郡（現在は埼玉県の南部から豊島区にかけて）、江戸郷を治め、荒川、入間川に沿って活動した。

群雄が割拠していた武蔵国

河越氏が、現・川越市上戸の台地に荘園（奈良時代に律令制下で農地の増加を図るために認めたことに始まる私有地）をひらいたのは、永暦元年（1160）のころと伝えられているが、それに先立つ保元の乱では、源義朝に従って上洛した。保元元年（1156）七月、河越重頼は弟の師岡重経とともに源義朝の陣営に加わり、『保元物語』では河越・師岡を「高家」と称している。高家とは、格式の高い、権勢のある家柄をもつ由緒正しい家、名門のことである。

平治元年（1159）十二月、平治の乱で義朝が滅びたのちは平家に従い、平家を介して所領を後白河上皇に寄進して新日吉社（現新日吉神宮）領として河越荘が立荘された。すでに本紙前号で述べた通りであって、本家（宗家ともいい、土地の所有者）を新日吉社、本所（実効支配権をもつもの）を後白河院とし、河越氏はその荘官（荘園の管理を委ねられたもの）となったのである。

河越重頼は何故源氏の惣領を援護したのか・・・

源義朝の子源頼朝は、平治の乱後の永暦元年、東国伊豆に流罪となったのであるが、その乳母比企尼は頼朝を援助するために武蔵国に下向した。河越重頼は比企尼の次女（河越尼）を妻に迎えたので、以後二十年余りにわたって頼朝と近しい縁故が生じたので、平家に従いながらも源氏と深い繋がりをもつことになる（『吾妻鏡』寿永元年十月十七日条）。

比企尼は、武蔵国比企郡の代官（所領の政務を代行する職）を務めた、比企掃部允の妻で、三人の娘は、源頼朝に近しい人々に嫁ぎ、嫡女が再嫁した相手の安達盛長は頼朝の側近となり、次女は武蔵国の有力な豪族河越重頼、三女は伊豆国の豪族伊東祐清に嫁いでいる。比企尼は比企郡から頼朝に米を送り続け、三人の娘婿にも頼朝への奉仕を命じていたという。長女と次女の娘はそれぞれ頼朝の異母弟・源範頼、源義経に嫁いだが、男子に恵まれなかったため、比企氏の家督は甥の比企能員に跡を継がせている。後に能員が頼朝の嫡男・頼家の乳母父となって権勢を握ったのは、この尼の存在におけるところが大きかったようだ。尼の次女と三女も頼家の乳母となっている。

武家政治の成立に向って・・・

河越氏の不滅の貢献

河越重頼は畠山重忠などとともに、平氏として、治承四年（1180）八月には三浦氏が拠る相模衣笠城を攻略したが、十月には、「長井の渡し」で頼朝に降伏してその配下に入るという平家から源氏へと変転を余儀なくされた。既述したように、安房国で再起した源頼朝が隅田川を渡り、鎌倉へと向かう途上のことであり、河越重頼の行動は、武家政治への歴史的なキー・ステップとなったのである。

河越重頼の光と影

河越重頼は娘を源義経に嫁がせる・・

重頼は武蔵国留守所総検校職の地位を得、武蔵国入間郡「河越館」の武将として勢力を伸ばしたが、源頼朝の命令によって、元暦元年（1184）、自らの娘を上洛させ、弟に当る義経に嫁がせた。頼朝は鎌倉八幡宮の社前で、自らが仲人となって婚礼を挙げたが、義経本人は知らず、西国に在って不在であったといわれ、重頼親子の悲劇の始まりともなった。

義経の正室となった女性の名前は、伝承では郷御前と呼ばれているが、故郷である河越（川越市）では、京に嫁いだ姫である事から京姫と呼ばれ、また終焉の地である平泉では、貴人の妻の敬称である北の方と呼ばれている。

河越重頼父子は戦う

同年の一月、河越重頼、重房らは、源義経軍につき、義仲軍を破る。重頼の嫡男重房は、義経の側近として『平家物語』にもその活躍が描かれている。院の御所六条殿を警護し、二月、河越重頼、重房らは義経に従って平家を追討し、一の谷で平家を破る。五月、源頼朝は、義仲の子志水義高の残党討伐のため、河越重頼らを信濃に派遣した。

しかし頼朝に誅殺される

その後頼朝と義経が対立すると、事態は一変、義経の縁戚であることを理由として重頼・重房父子は誅殺され、武蔵国留守所総検校職の地位も重能の子畠山重忠に奪われた。

文治元年（1185）十一月、河越重頼の領地は没収され、同三年二月、義経は妻であった重頼の娘、子らを伴い、奥州平泉藤原秀衡の許に向かう。重頼、重房が誅されたのは、その年十月との記録が残されている。

文治五年（1189）四月、藤原泰衡は、奥州衣川館に義経を襲撃する。義経（三十一才）は、妻（二十二）、子（四才）とともに自害した。

その後の河越氏は・・・

一時期衰退はしたものの、河越荘の所領はその子孫が代々継承し、重頼の三男・重員の頃（1220年代）から再び有力な武士としての立場を確立し、繁栄に転ずる。また、河越氏は、嘉禄二年（1226）には鎌倉幕府から武蔵国国守の代理という重要な役職を与えられ、鎌倉時代から戦国時代末まで豪族として勢力を誇った。河越経重は、文応元年（1260）に館内の新日吉社に梵鐘を奉納し、文永九年（1272）には高野山町石を奉納したとの記録がある。

地域情報：賑やかだった「いろは市」

東日本大震災復興支援チャリティー

志木市本町通り（本町1～3丁目のバス通り）で8月28日、午後1時～6時に開催された。主催は「いろは商店会」

恒例の阿波踊りとサンバ

NPO市民フォーラムが編集する
CREATIVE BOOK　新書判
好評発売中！
新書判 240ページ・フルカラー
定価 1260円(税込)
全国書店で発売中　ネットでも購入できます。
発行:(株)ヒューマン・クリエイティブ／発売:揺籃社 電話:042・620・2616

CREATIVE BOOK 11号
「山手線は廻る」環状鉄路の誕生
新橋から品川・横浜へ、日本の鉄道建設は明治五年に始まった。半世紀を経て完成した環状の「山手線」は、首都東京の大動脈となる。本書は山手線各駅近傍の地誌を語り、歴史的な変遷を偲びつつ、気ままに読み下せるように編集された物語り。

CREATIVE BOOK 10号
「隅田川を遡る」橋梁物語
空撮写真のほか多彩なカラー写真を添えて隅田川に架かる橋梁と両岸の賑わいを訪ね、江戸時代からの歴史を語る。

特定非営利活動法人
NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。
また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。
読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。
TEL 090（3048）5502
編集部　原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行。